



# i-Reporter

アイレポーター

## 活用事例

---

**食品製造業の複数部門で、電子帳票の横展開をわずか1年で実現！  
大幅な工数削減や品質向上への取り組み等、多岐に渡る成果に結びついた**

**(備後漬物株式会社)**

**CIMTOPS**

## 食品製造業の複数部門で、電子帳票の横展開をわずか1年で実現！ 大幅な工数削減や品質向上への取り組み等、多岐に渡る成果に結びついた

備後漬物株式会社（食品製造業）



備後漬物株式会社は1946年の創業以来漬物・キムチの製造販売を中心に事業を展開してきた食品メーカーで、業界のリーディングカンパニーとして知られる。本社工場（広島県福山市）と関東工場の2拠点で安定供給体制を構築し、関東・関西・九州に営業拠点を展開。「食を通じて家庭に幸せと感動を届ける」を理念として掲げ、伝統と革新を融合しながらさらなる価値提供に取り組んでいる。



生産本部 本社工場  
副工場長

村上 友孝氏



管理本部  
DX推進室

谷本 亜依氏



管理本部  
DX推進室

彌重 昭寛氏



品質管理部

岡野 紗季氏



生産本部 生産管理部  
営繕・設備保全課

西川 亮輔氏



備後漬物株式会社では手書きによる帳票記録が長年の慣習となっていたが、その運用に関して改善すべき様々な課題が顕在化していたという。同様、帳票の記入ミス、消費される大量の用紙、記録を整理するのにかかる膨大な時間、記入漏れのリスクなど他の製造業にも共通の問題に加え、水が多く使われる現場環境ならではの課題も抱えていた。

紙の帳票は、当然のことながら水に弱い。そのため、ラミネート加工した帳票の上に消せるマジックペンで記録をし、それをコピーして保存するという工夫もしていた。当然この方法では手間も増えるし、文字が滲んで判読しづらくなるリスクもある。さらに、同社では多くの外国人スタッフが業務に従事しており、漢字での記録が難しいというケースもあった。

これらの複合的な課題を解決する声が現場からも上がり、同社ではDXを本格的に推進することとなった。その際に検討した複数のツールの中からi-Reporterを選んだ決め手となったポイントは「既存の紙帳票レイアウトをそのまま電子化できる」という点だったという。

DX推進担当者の期待通り、電子帳票はスムーズに受け入れられ、わずか1年で生産部、品質管理部、購買部、営繕課と複数部門での横展開を実現。結果、手書き帳票が抱えていた課題は解決し、単なる「記録の効率化」の枠を超えた業務改善が進んでいる。

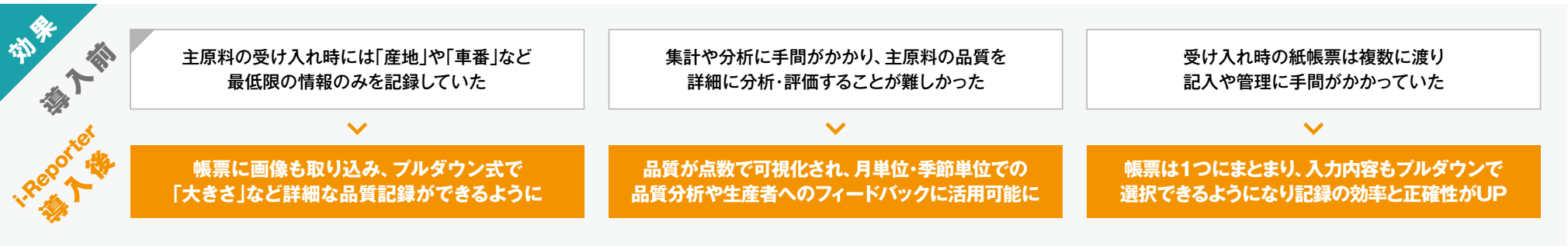
NEXT

各部門が抱えていた課題 & 導入後の改善について詳しくは次ページから! ▶



## 2 原料受け入れ時の品質評価を数値化し、生産者へのフィードバックにも活用

購買部では、主原料となる白菜の受け入れ時の品質・数量確認記録にi-Reporterを活用している。当初はペーパーレス化が目的だったが、電子帳票により客観的な品質評価が可能になったことで、農家へのフィードバックにも活用されるように。結果として、主原料の品質向上や生産者のモチベーション向上にも貢献している。



### 抱えていた課題

購買部では主原料(白菜)を受け入れる際、「産地」や「車番」などトレーサビリティを確保するために必要最低限の情報を記録していた。帳票は複数枚にまたがり、**記入や管理に手間**がかかるうえ、**記載ミスや記入漏れ**も起こりやすかったため、電子帳票導入のニーズが高まっていた。

また、購買部は原料の品質をいち早く確認できる立場にありながら、**品質評価は感覚的なものにとどまり、情報を活用する仕組みもなかった**ため記録は主に確認用として扱われていた。

品名	仕入先	車番	産地	数量	単価	金額	品質	備考
白菜	〇〇〇	1234	〇〇県	100kg	1000円	100000円	品質A	
白菜	〇〇〇	5678	〇〇県	200kg	1000円	200000円	品質B	
白菜	〇〇〇	9012	〇〇県	150kg	1000円	150000円	品質C	
白菜	〇〇〇	3456	〇〇県	120kg	1000円	120000円	品質D	
白菜	〇〇〇	7890	〇〇県	180kg	1000円	180000円	品質E	
白菜	〇〇〇	2345	〇〇県	160kg	1000円	160000円	品質F	
白菜	〇〇〇	6789	〇〇県	140kg	1000円	140000円	品質G	
白菜	〇〇〇	0123	〇〇県	110kg	1000円	110000円	品質H	
白菜	〇〇〇	4567	〇〇県	130kg	1000円	130000円	品質I	
白菜	〇〇〇	8901	〇〇県	170kg	1000円	170000円	品質J	

### 導入後の変化

帳票に画像を取り込めるようになったことで「大きさ」や「鮮度」等の品質を記録し、評価をプルダウンで選択する仕組みが確立。**記録の負担が減っただけでなく、原料の状態に応じて点数が自動計算される仕組みにより客観的な品質評価も可能**となった。

点数で可視化されたデータは**月単位・季節単位での品質分析**にも活用できるようになった。さらに、記録を生産者に送ることで「**品質向上のためのフィードバックツール**」としても活用されるようになり、トレーサビリティのための記録を超えた運用が実現した。

### 電子帳票で始まる、生産者との新たな連携の形

高品質な製品づくりには**原材料の生産者との連携**も欠かせないが、手書き帳票では情報を分析に活用したり共有したりすることが難しく、**帳票が単なる記録に留まってしまう**ケースが少なくない。

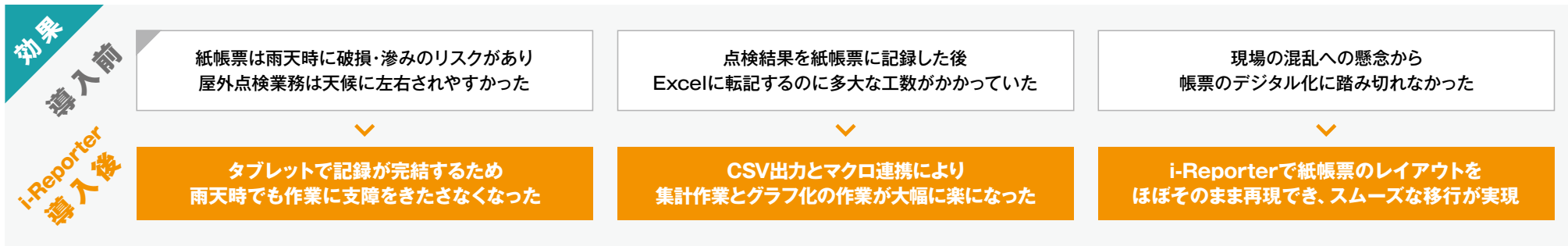
電子帳票なら、蓄積されたデータをもとに傾向を詳細に分析したり、第三者と共有したりといった「**活用の幅**」が大きく広がる。本事例では、**品質評価の記録を農家にフィードバック**することで、原材料の品質向上や生産者としてのやり甲斐につながった。さらに農家同士が互いの情報を参考にしあう形で、**生産者側での品質向上の相互学習**も生まれているという。

電子帳票は活用の仕方次第で、**企業の枠を越えて品質を高めるためのコミュニケーションツール**としても活躍できるのだ。



# 3 手書き帳票のレイアウトを活かした電子帳票で、点検作業の効率化に成功

営繕課では、排水処理施設・受電設備・冷水処理設備の3種の設備点検を日々実施している。屋外作業が中心のため、従来の紙帳票では雨天時の記録がしづらく、記録内容をもとにExcelで作表する作業も現場の負担となっていたが、帳票をデジタル化したことでこれらの課題が解決し、作業は大幅に効率化された。



## 抱えていた課題

各設備の点検記録を紙帳票に手書きし、後からExcelに転記・集計する運用を行っていた。

記録は屋外での作業が中心となるため、特に雨天時には帳票の汚損により場合によっては後で判読することができなくなる等の支障をきたすケースもあった。

点検内容は推移の確認に用いるため、手書きの記録をExcelに改めて入力し直してグラフ化する作業がセットになっており、これにもかなり時間を要していた。

## 導入後の変化

記録はタブレットで行えるように、天候を気にする必要がなくなり、作業しやすくなった。

i-ReporterならCSV出力ができるので、Excelへの転記作業も不要になった。必要な項目をマクロで抜き出すこともできるため、作業は大幅に効率化された。

営繕課で用いる帳票の様式は複雑で、デジタル化の際に再設計の懸念があったが、既存のレイアウトをほとんどそのまま電子化でき、混乱もなくスムーズな移行に成功した。

## 使い慣れた紙帳票をそのままに電子化を実現

DX推進を進める上で多く聞かれる声が「**使い慣れた紙帳票を手放せない**」というものだ。特に設備点検記録等のように記録内容が複雑な帳票を用いる現場の場合、電子帳票を一から再設計するとなると開発に現場スタッフも深く関わってもらう必要があったり、実際に作業するスタッフが新しい帳票に馴染むまでに時間を要したりと、スピード感をもった移行が難しくなる。

i-Reporterには、**紙帳票のレイアウトをほぼそのまま維持して電子化できる**という特長がある。従来の見た目や書き込み位置がほとんど変わらないので、導入ハードルになりがちな「**現場の不安や抵抗感**」を軽減することができる。

慣れ親しんだ紙帳票の良さを活かし、効率化を図る。**心理的なハードルを取り除いた導入**こそが、スムーズなデジタル移行を実現する鍵となる。

